

したが、その父は幕府の役人であったため直ぐに鎌倉へ報告したから、正中元年九月十五日早朝、六波羅の軍勢二手に分かれて密談に加わった土岐、多治見を攻めた。二人は少しも騒がず立派に戦って討死した。幕府は資朝、俊基の公卿二人をも鎌倉へ召喚したが、資朝は男らしい人物で、総て自分一人の計画であつて、土岐・多治見以外には仲間はいないと断言し、全責任を負うて佐渡へ流された。そのため外の武士も公卿も助かり、俊基も釈放されて京へ帰ることが出来た。



五絃閑話

水藤 五朗

三種の神器

このところ教科書についての論議が高まっている。加えて云えば、歴史の教科書の記述に於ける解釈が、その論議の火種となつたのであるが、現代の我々の生活の中に於いて、とかくすると歴史への思考が薄らいでいるだけに、そうした点からすると、これは歴史再考の良い機会になるものと、私は思う。

今、ここでその詳細を論評するつもりはないものの、たゞ一つ述べておかなければならない事がある。それは、教育に於いて、教科書とは何なのかとの疑問である。勿論、学校

教育に於いて教科書が極めて大切な役割を果たしていることは当然であり、それは日本のみでなく中国も韓国も同様であろうと想う。がしかし、教育が教科書の読解のみに留まるものでないことも周知の事実である。とすれば教科書の記述のごく一部について、あまりにもこだわった解釈をしたりする中国、韓国の提言は妥当とは云えない様に思える。と同時に、文部省の主張する検定制度に関しても、その必要以上の運用は、やはり問題があるのであつて、結局のところ、双方の考え方、即ち、教科書が教育そのものの、又は第一の要となる物だとの方針が弾力的な変化を示さない限り、論議の解決には至らないと云えよう。

教育に於ける教科書の役割、即ち教科書の検定制度については教育学、又は教育制度の問題であるのに対し、教科書記述の是非については学問、又は思考の問題である。そしてこの二つが交錯しているところに、今回の論議の複雑さがあるように思える。

こうした問題は琵琶にもある。即ち、琵琶を伝えてゆくのは、どうしても楽譜がある。今日は、それが一層望まれている。

琵琶が広まらない原因の一つに楽譜の不足又は、教則本の欠如をあげる声がある。勿論それが全てではないにしても、核心を突いているものと私は思う。

今日の音楽文化を支えているものは、楽譜、楽器、楽録、の三つであると云う。楽録とはレコード、テープなどの音楽演奏の録音をし

たもので、とにかく、この三つが、今日の音楽文化隆盛の基礎となつていて、云わゆる三種の神器なのである。

この三分野に実績を上げることが出来てこそ、今日の社会に生きた音楽として存在し、人々から評価を受ける事になる。

琵琶について考えてみると、楽譜、又は教則本の欠如が叫ばれる以前に、琵琶人がそうした物をあまり望まないと云う現実がある。それには琵琶演奏の自由性が原因となつているものの、反面、初心者若しくは門外漢には、近付きにくい芸能となつてしまふ弊害も生んでいる。即ち、生き得ないものである。

私が常々例にとる落語にしても、速記本といわれる落語の本が根強い人気を持つて、今日の落語文化を支えている事は、一考に値する。落語の速記本は音楽で云えば楽譜である。琵琶人の論からすれば、楽譜の読み書きよりも、実際の演奏の方が大切な修業であり、更には、楽譜で決めてしまつては、琵琶の自由な、幽玄な味が出ないのだと云うことになる。勿論、これは正しい主張であつて、ジャズの音楽を見ても自由と即興を基調とするのは琵琶と同様である。

だが、ジャズには極めて厳格で複雑なコードの約束事があつて、それを如何に駆使するかがジャズの即興又は自由になるのであつて、それについては、当然、楽譜などで学ぶことが可能なのである。

琵琶を多くの人々に広めるためには、楽譜

の整備と公刊が急がれて、しかも、全ての流派に共通するものが研究されてゆかなければならない。たゞ、現実としては、落語の速記本と同様、歌詞の記述の整備、公刊に旨を於いて、歌詞本の刊行が論議されてゆかなければならない。

楽譜の問題は、第二の楽器にも関係が深く、それ故に難問なのであるが、これが実現しない以上、箏、三味線、尺八等々の一般邦楽に近づくことは難しいと云える。

敢えて云えば、前述した一般の邦楽器にも流派があり、それぞれ個々の楽器の差異がある。にもかゝらず、今日、多くの演者を持つているのは、やはり楽譜の整備、公刊がなされているからである。

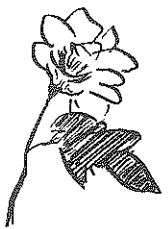
教育に教科書が不可欠であるとする考え方に對しての評価は別として、現実には、音楽に於ける楽譜の如く、多くの分野で、記述を通しての伝承、伝播が行われている。

琵琶が、現代に生きてゆくことを望むのであれば、やはりこうした点に、斯界挙げての対応がなされなければならないと思う。

鶏と卵の話ではない乍ら、多くのファンを得たからこそ三種の神器を手がけたのか、三つの神器を手掛けたからこそ多くのファンを得たのか、それは神のみぞ知る、である。

千姫乱行

辻 旭城



近畿錦心流琵琶界のかつての重鎮馬瀬槍水師と野尻撰水師は互いに技を競つたが、今は二師とも亡き人となつた。各地の演奏会等で演奏された馬瀬師の「勸進帳」と野尻師の「坂崎出羽守」は、今だに筆者の耳に残っている。両師の御冥福を祈つて、千姫と坂崎出羽守について筆を進めてみよう。

もう十年前も前のこと、石橋旭嶺君と大阪都島毛馬の野尻撰水師のお宅を訪問したことがあつた。師に千姫について聞いてみたところ「英雄は色を好むというが、家康もその一人であつた。千姫も家康の孫娘ゆえ、隔世遺伝というか、私は淫婦論を真向から否定はしないが、さてどれを疑い、どこまで信用してよいか。私の信じる限りでは、千姫ほどその生涯の伝説と疑惑に包まれた女性はいないであらう」と話してくれた。

悲劇の主人公千姫は、徳川二代將軍秀忠の長女として生まれ、僅か七歳で十一歳の豊臣秀頼の花嫁として大阪城に入った。その結婚は秀吉の切望によるもので、いわば可憐な、いけにえであつた。

たもので、とにかく、この三つが、今日の音楽文化隆盛の基礎となつていて、云わゆる三種の神器なのである。

この三分野に実績を上げることが出来てこそ、今日の社会に生きた音楽として存在し、人々から評価を受ける事になる。

琵琶について考えてみると、楽譜、又は教則本の欠如が叫ばれる以前に、琵琶人がそうした物をあまり望まないと云う現実がある。それには琵琶演奏の自由性が原因となつているものの、反面、初心者若しくは門外漢には、近付きにくい芸能となつてしまふ弊害も生んでいる。即ち、生き得ないものである。

私が常々例にとる落語にしても、速記本といわれる落語の本が根強い人気を持つて、今日の落語文化を支えている事は、一考に値する。落語の速記本は音楽で云えば楽譜である。琵琶人の論からすれば、楽譜の読み書きよりも、実際の演奏の方が大切な修業であり、更には、楽譜で決めてしまつては、琵琶の自由な、幽玄な味が出ないのだと云うことになる。勿論、これは正しい主張であつて、ジャズの音楽を見ても自由と即興を基調とするのは琵琶と同様である。

だが、ジャズには極めて厳格で複雑なコードの約束事があつて、それを如何に駆使するかがジャズの即興又は自由になるのであつて、それについては、当然、楽譜などで学ぶことが可能なのである。

琵琶を多くの人々に広めるためには、楽譜

竹下翠風演奏会

とき 十月十一日(休)午前十一時開演
ところ 町田市民ホール
(小田急町田駅西口三分)

出演者と演奏曲目

- 「義士の本懐」竹下翠風 「南部坂」
- 「吾妻江風」 「青山播磨」 杉山旗水
- 「多助とあを」 横浜旭会々員
- 竹下光子作 短歌朗詠秋のうた五首
- 同 短歌舞踊
- 外に吟詠、劍舞、琵琶等数番

鬼のような真田がつれて

退きも退いたり鹿児島へ”
当時こんな童唄が巷で唄われた。では、どう
いう方法で秀頼が、焼け続く城から脱出し
たか？

智者真田幸村は、大野治長、木村重成、後
藤又兵衛らに命じて、秀頼と淀君を素裸にし、
幾重にも菰に包んで城の水門から堀に流し、
さきに打合せずみの織田有楽斎の舟で淀川へ
運び、淀川尻から加藤清正の息子忠広の軍用
船で、肥後の城まで送ったと難波軍実録に
記されている。

さて、大阪城は火に包まれ、危機一髪の中
を命がけで千姫を救出した坂崎出羽守。「姫
を救出した者には姫を与え、一万石の加封」
という家康の公約に坂崎は、猛火のため顔面
は焼けただれながら千姫を救出したが、見る
も無惨な姿となったため千姫は坂崎を拒否し、
一年後に美男本多忠刻に輿入れした。
約束を守られなかった坂崎は、謀叛を起こ
そうとしたが、お家大事の家臣達によって謀
殺された。時に坂崎五十歳、千姫二十歳、忠
刻は二十一歳であった。

千姫は、十萬石の化粧料持参で盛大な婚礼
式を催し、本多忠刻に嫁して優雅な姫路城で
十年間平穏な月日を送ったが、寛永三年(一
六二六)忠刻は三十一歳の若さで死去した。
再び未亡人となった千姫は三十歳の女盛り
で、これから乱行がはじまる。厚化粧の毒々
しい千姫像と変身し、まず鉄砲組の美男磯野

源之丞に思いを寄せたが成らず、自暴自棄と
なった千姫は、江戸吉田御殿二階の窓から源
之丞に似た美男を連れ込んで弄んだ後斬殺し
て井戸に投げ込んだ。こんなことの繰返し
やがて評判となり
”吉田通れば二階から招く
しかも鹿の子の振袖で”
の俗謡となってひろがる。これが將軍の知る
ところとなり、懺悔の上遂に自害となったの
である。



おんなの都(九)

落合一誠

皇妹和宮(2)

皇女を將軍の妻にという発案の出所は、井
伊直弼の諫臣長野主膳と、九條閑白の諸大夫
をして島田左近の両者であつて、この両
人は、幕府と京都を結ぶ策謀の根源をなして
いた。

長野主膳は、公卿の落胤という噂もある
けれども、元來出身が明らかでなく、旅から
旅へと漂泊する巡回講座の教師のようなこと
をしていた。ところが、当時まだ一介の公子
に過ぎなかった井伊直弼と知り合つて、その
師となつた。大休彦根藩は國学の盛んなこと

ろで、御多分に洩れず直弼も國学好きであつ
た。そこへ京都のお公卿さんに縁のあるとい
うふれ込みの國学者長野主膳がやつて来て、
短期間の國学講座を開いた。そこで、聴議に
行つてみると、なかなか学識が豊かであつた。
すつかり気に入つた直弼は、主膳を師と仰ぐ
ようになった。

そのうち彦根藩の後継ときまっていた兄の
子が早死にしまつたため、いつまでも養
子先がきまらないので、たまたま売れ残つて
いた末弟の直弼に好機がめぐつて来た。こう
して思いがけない藩主の座についたばかりか
家柄によつて大老となつた井伊直弼は、主膳
を取り立て、家臣の列に加え、京都朝廷の様
子に詳しい所から、對朝廷工作の役に任命し
た。

折から、外國の圧力で開國するか否かとい
う重大問題が起こり、困つた幕府は、勅使を
仰いで諸侯の反對を封じようとした。ところが
が孝明天皇は大の異國ざらいであつて、幕府
の懇請をはねつけられてしまつた。そのため
長野主膳は、黄金をもつて九條家の諸大夫島
田左近を抱き込み、九條閑白を味方につけよ
うというので、様々の工作を行つた。

この時、病弱な將軍家定に実子がなかつた
ため、後継者に誰をするかという問題がから
んで来た。そこで、一橋慶喜を推す水戸齊昭
や越前の松平慶永に對し南紀徳川の慶福を押
す井伊派が對立して政争が起こつた。
そこで、長野は盛んにお公卿さんたちに入

れ智恵している勤皇浪士たちを弾圧するため
まず梅田雲浜を押さえ、続いて頼三樹三郎を
捕え、やがてそれが政治的弾圧に發展して、
吉田松陰や橋本左内を捕えて斬るという安政
の大獄に發展した。そして井伊は、反對派の
水戸や越前、土佐などの諸侯並びに近衛や鷹
司の諸卿を皆追放してしまつた。

だが、そのため一層諸國の勤皇家たちが憤
激して、幕府と朝廷の間が険悪になつてきた
というので、長野主膳は島田左近と相談して、
皇女の降下を願おうと云い出した。この時は
幕府と親しい九條閑白の妹夙(あき)子と孝
明帝との間に生誕した富貴宮(ふきのみや)
が最もふさわしいとされていた。

けれども、万延元年に井伊が暗殺され、一
たんこの話は立ち消えとなつてしまつた。然
し直弼の片腕ともいふべき安藤対馬守が主席
老中として権勢を持ち始めると、どうしても
公(朝廷)武(幕府)の融和を圖つて、諸國
の勤皇家たちのつけ入るスキをなくする必要
があるというので、所司代酒井忠義と安藤の
間で、皇女降下問題が再燃して来た。

人間の運命というものは判らない。その頃
皇女和宮は桂宮邸で、やがてくる婚禮の日に
備えて、花嫁修業に励んでおられた。勿論和
宮の胸中には良人になる筈の有栖川宮熾仁親
王のみで、將軍家茂などではなかつた。とこ
ろが、その間に着々と降嫁の工作が進んでい
つて、それには將軍家茂と同齡の和宮がもつ
ともふさわしいということになつてしまつた。

だが、天皇はもとより和宮の降嫁には大反
對であつた。孝明帝の御兄妹は男七人、女八
人合計十五人の多くに上つていたが皆夭折さ
れ、現在は帝と異母妹敏宮、和宮のお三方を
残すのみとなつていたので、ひとしお帝の愛
惜も強く、一層降嫁に反對されたのであろう。
ところが、公武一体のため、且つ幕府が朝
廷を尊崇している証拠として、是非其皇妹の
降嫁を願いたいと、飽くまで食いさがつた。

そして、そうすれば開國をやめて攘夷を断行
する旨奏請した。同時に、降嫁に反對する公
卿たちを圧迫し、朝廷側を追いつめていつた。
そのため天皇は、攘夷決行の條件つきで、
やむなく同意されることになつた。

四絃漫筆

島津天嶺



十四 中間集約

本来隨筆とか隨想というものは、その道の
達人が広い智識と長年の経験を經とし、すぐ
れた思想を緯として織りあげるので、珠玉の
作品ができるのであるが、私のこの漫筆は、
「はしがき」でお断りしたように、資料を集
めながら、知識を仕入れながら、筆をとつて
いるので新たに仕入れた資料によつて今まで

述べたことが少し變つたり、或いは「より明
確になる」ことが起こる。

私は、(三)琵琶振興の論や、(九)琵琶振興の論
その後(このタイトルの琵琶は琵琶が正当だ
つた)などで、現在の社界状態では短かい琵
琶歌が必要ではないかと主張してきたが、最
近読んだ本から大きな示唆を受け、私の考え
方も明確になつたような気がしている。

この本は小島美子(とみこ)氏の「日本の
音楽を考ふる」で、この中で「(前略)古典
音楽は日本音楽史のそれぞれの時代の、それ
ぞれの階層の音楽的要求に従つて作られ洗練
され、完成された音楽であるからである。た
とえば、雅楽は平安時代の宮廷貴族たち、能
は中世の武家たちの、地歌等曲は近世の比較
的身分の高い人の、長唄や浄瑠璃などは近世
の町民たちの、それぞれの音楽的要求によつ
て作り出されたものである。だから当然それ
ぞれの人ごとの音楽感覚を反映しているのだ
であつて、それらがそのまま現代の音楽にな
るわけではないのである。しかもそれらはすべ
てひじょうに完成した芸術的な音楽であつて、
それ以上近代的に發展する余地はあまりない
のである。これまでの日本人は、昔からの音
楽をその階層の後継者たちに引き継ぐ一方で、
このようにそれぞれの時代に應じて、新しい
音楽を作つてきたのである。

私たちが無精して昔の音楽で間に合わせよ
うなどとは思わないで、私たちの音楽要求に
従つて新しい音楽をつくらねばならない」と

述べている。(註)

考えて見れば、現代の琵琶は薩摩藩の武士階級の音楽であった薩摩琵琶が源流となり、明治時代の「國民階級」(明治以降は四民平等になつたので特定の階級はなくなつてゐる)の音楽的要求に従つて錦心流が起り、筑前琵琶が装(よそおい)を新たに現われ、錦琵琶が創成された。明治時代後期から大正初期に琵琶が栄えたのは、日本民族の興隆期であつたこの時代の國民の感覚に琵琶が、「フィット」したからである。

大平洋戦争中は國民の士氣鼓舞のために琵琶が利用されたが國民の共感を得られず、かえつて戦後しばらくは「謹慎状態」におかれたことは御承知の通りである。

戦後も終わり琵琶も復活したが、國民の考え方はすっかり變つてしまつてゐる。薩摩藩時代の琵琶はもちろん、明治大正期の琵琶も既に立派な古典伝統音楽となつてしまつてゐて、小島氏の言を借りれば「薩摩琵琶(現在鹿児島に残つてゐる純正派)は薩摩藩の武士階級の、そしてその他の琵琶は、明治時代の國民階級の音楽的要求によつて作り出され、ひじょうに完成した芸術的な音楽であつて、それ以上發展する余地はあまりない」ようである。

そこで「私たちが昔からの音楽を後継者たちに引継ぐとともに、この時代に應じて新しい琵琶を作らねばならない」と私も思ふのである。

それでは新しい琵琶とは何であらうか。舞踊や演劇とタイアップすることもよいであろうが、所詮は「さしみのつま」、やはり短時間で歌える歌の開發ではなからうか。

現在「琵琶吟」という言葉が用いられ、私もこの言葉を使つてきたが、考えて見れば今の時代感覚を受け入れた新傾向の琵琶歌に過ぎない。昔も「秋思詩」を組みこんだ「菅公」という立派な琵琶歌(これは池田天舟師がレコードに吹きこんでゐる)があつたことを私はすっかり忘れていたようである。

歌詞の方は漢詩や和歌入りの少し叙情的なものに變えてゆく、そして当然のことながら譜付け(作曲)も昔のような「譜い出し」、「切り」、「大千」といった定型的なものでなく、自由にその曲にあつた譜付けをする、こんなところに琵琶の進む道があるように私は感じてゐる。

小島氏の本を読んで私は眼の鱗が落ちた思ひであつた。今まで自分で模索し、又本誌にもいろいろ書いて来たが、今の結論は以上の通り、一応私のこの種の論の「中間集約」と致します。

(註)「日本の音楽を考える」著者小島美子 発行所、音楽の友社・五一年七月初版



「菊の会」誕生

上畑 旭 樹



関西の琵琶界に新しい輪が一つ誕生した。その名は「菊の会」といい、人の意見を聞く、友の言葉を聞く、菊の花に似た小さな若者たちが一つの花を咲かそうというもの。

去る八月二十一日(土)午前十一時、大阪津村別院(北御堂)の地下ホールで発足会を開いた。日本琵琶協会の関西支部長山崎旭樹先生を始めとして、平井春嶺、矢吹旭津美、菅旭香、横野旭鳳(代理)、遠く名古屋から前田旭城の各先生方が世話人として列席され、会員は、雨宮せつ子、上畑旭樹、奥村旭翠、小橋旭蓉、北村旭心(名古屋)、近藤高嶺、島田旭光、竹本旭将、坪内旭鳳(名古屋)、永井旭美、西田旭桜(小学生)、古川道子、山田明嶺、山本旭洋、楊光子の十五名が出席。

会の設立などは上畑の説明により、また議事進行は平井先生に議長を務めて頂き、会則、会長、副会長、総務、会計の選出など約一時間ばかり議論討論出された。そして、会長竹本旭将、副会長島田旭光、総務上畑旭樹、会計小橋旭蓉が就任し、それぞれ抱負を語つた。集約すれば、我々若者が全力を出して会員の親睦、交流をはかり、琵琶界發展への基

礎として努力してゆくというものであつた。また一つの特徴として会費は無料で演奏発表会を年一、二度開くが、小さなホールで、会員が千一二十人出合つて、その度にまかなつてゆくという。

會議の最後に山崎先生が「こうして若い者が自らの力で発表会を開き、弟子同志の親睦を深める事は、長い将来を見れば大変喜ばしい事であり、団結して末長く続けて欲しい」と激励され、平井先生も「一つの団体を継続するのは大変であるが、若さという行動力を生かし、琵琶を拓めるために努力して欲しい、私達も応援する」と力強いゲキに、会員一同感激した。

引続き行われた演奏発表会では、竹本旭将、羅生門、島田旭光、羅生門、奥村旭翠、曲垣平九郎など、たつぷりと聞かせる芸を披露した。また小学生の西田旭桜、本能寺には全員、将来へのすばらしい圧倒された。その音の確かさには会長竹本もビックリといった感じだつた。

午後四時過ぎに演奏発表会を終り、次回の集いを約束しながら、暑い夕暮の街へ先生方をお送りし、幹部達は一息ついたのだつた。

(予 告)

○：京都琵琶協会十月例会 十月三日(日)午後二時本部平井会長宅

○：藤巻旭鴻琵琶演奏会 十月三日(日)午前十一時半東京千代田区大手町農協ホール、後援日本琵琶協会はか。水藤五朗、木原綾子その他東京、大阪、神戸、明石、鹿児島

名流十一名及び琴・笛・華道・茶道・舞踊等数氏協賛出演。(有料)

○：故前田秋声師追悼演奏会 十月十日(日)午後一時半横須賀市民文化会館、主催土橋虎水氏。一水会横須賀支部員の外東京友吉鶴心、同桑名洲聖、富士久保田栄水、名古屋松浦秋翠の各氏協賛出演。

○：竹下翠風演奏会 十月十一日(休)午前十一時東京町田市民ホール。(別項参照)。

○：京都伏見稲荷大社琵琶献奏会 十月十一日(休)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。

○：各流派琵琶秋季演奏大会 十月十六日(土)午前十一時京都烏丸御池京都商工会議所ホール、主催京都琵琶協会。協会の外名古屋丹野鮎水、福井内田景水、大阪渡島旭鷲、同竹本旭将の四氏特別出演。

○：第三回書生琵琶演奏会 十月十七日(日)正午東京港区赤坂公会堂、主催尾崎三郎氏。青年の部九名、壮年の部十二名、外に詩吟八題。

○：琵琶と詩吟・詩舞の会 十月三十一日(日)午前十一時西宮市立夙川公民館松下ホール、主催三浦蓮水会。蓮水会・一水会神戸支部全員の外一水会金沢、福井両支部長、同大阪支部、筑前木庭旭山の各氏協賛出演。会主蓮水女史は琵琶舞小督、勸進帳等演奏。

○：筑前琵琶橋会全国大会 十一月十四日(日)佐世保市民会館、司会佐世保橋会。

筑前琵琶紅会演奏会

八月二十八日(土)十一時半東京日本橋三越劇場、主催紅会。第二十二回の演奏会でNHK鈴木健二アナウンサーの司会により華々しく開催され盛況を呈した。会歌くれない一同あつもり大庭・絃旭鳳・白虎隊・横井・絃旭鳳・安宅の関・押木旭立、浜野旭愛、宇

大阪安居天満宮献奏琵琶会

七月二十五日(日)十時一十六時、大阪琵琶同好会協賛。赤垣源蔵、藤原、花の白虎隊、寛吉野懐古、玉村、河内の宿、朽木、小栗栖、辻旭城、菊水の旗、多和、湖水渡り、柴田旭女、川中島、小林旭津、岩壁の母、島津旭都、壺坂寺、石田旭扇、石童丸、作花旭友、姫百合の塔、西川旭明、新曲菅公、米原、島津、石橋旭嶺、本能寺、野々村旭心、真田幸村、天津八千代。外に扇舞、劍舞、日舞等。

京都琵琶協会八月例会

八月二十二日(日)昼二時本部平井会長宅。三十二度という厳しい酷暑で冷夏に馴れた身には一入応える。冷房のよく利いた二階大広間に平井春嶺、水内煥水、桜井旭富、牧秋静、山岡旭清、矢吹旭津美、安住旭康、梅原旭瀧、岡本旭村、林旭萌、馬場鴨水、山田明嶺、高橋正雄、楊光子、福島弥生、植村真水の諸氏出席。大徳寺、桜井、武蔵野、山田、本能寺、楊、村上喜剣、山岡、紅葉狩、馬場、七卿、落、牧、河内の宿、水内、茨木、植村の各氏研修演奏のあと十月十六日開催演奏会の出演順抽籤その他の打合せをなし、夕食時には一杯機嫌の馬場さんが歌謡曲「荒城の月」の講義や合唱など一同大いに若返り七時なごやかに散会した。尚病氣入院中の荒木旭媛、楊嶽水両氏の速やかな平癒を一同祈願した。